

《紹介》

ヤロスラフ・クレイチャー氏の

『比較革命論』

鈴木博信

1

「立上りのはげしい突撃が一段落すると、永遠に葬り去ったと公言していたはずの旧体制の色調・性格のいくつかを当の革命がうけつぎはじめるというのが、あらゆる革命にきまっておこる歴史現象なのである。したがって、ロシア革命が、日を経るとともにいくつかの面で古くからのロシアの民族的伝統に回帰したようにみえるのは、おどろくにあたらない」<sup>1)</sup>。ソビエト・ロシアが一九世紀の社会主義者たちがおもい描いたのとはいじめるしくかけはなれた体制になった事実について、E・H・カーはこういい切っています。この半世紀ほどのあいだ、歴史上のさまざまな革命について共通の力学を抽出しようとする試みが行われるようになったかげには、「革命の革命」をもって自任し先立つ各種の革命を超えると豪語したはずのロシア革命もまた、歴史のなかの先祖帰り現象をまぬがれなかったという事実が大きく作用しているといえそうです。

ここに紹介するヤロスラフ・クレイチャー氏の『比較革命論——理論モデルの探求』(Jaroslav Krejčí, *Great Revolutions compared: The Search for a Theory*, New York and Brigh-

ton, Sussex, 1983)<sup>2)</sup>も、革命現象のたどる共通のパターンに目をすえ、いわば革命の「一般理論」をつくらうとした試みです。

クレイチャー氏は1916年生まれ、ランカスター大学でヨーロッパ研究を担当してきた長老教授ですが、名前が示すとおり、1968年のプラハの春の挫折のあと、イギリスにうつったチェコ人のインテリです。祖国では経済学者としてスタートし国民所得や生活水準研究の専門家としてチェコの国家計画庁国民所得部長までつとめたあと社会主義の現実には幻滅して長らく筆を折っていましたが、プラハの春の前後から研究活動を再開しました。イギリスでは広い文明論的な視野に立って歴史のなかの中・東欧をみつめる旺盛な著作活動を展開しており、本書のほかには *Postwar Czechoslovakia* (New York, 1972), *Ethnic and Political Nations in Europe* (with V. Velimsky, New York, 1981), *National Income in Czechoslovakia, Poland and Yugoslavia* (New York, 1982), *Sozialdemokratie und Systemwandel* (editor and co-author, New York, 1978) など多くの労作を産みだしています。

ところで、これまで行われてきた革命比較論は、ふつう三つの系列に大別されます。すなわち、どんな社会過程を「革命」と定義するのか、そして革命と名づけられた過程にはどんなタイプがありうるのかを論じる定義論・類型論(Taxonomy)、革命を引きおこす要因を特定しようとする革命の原因論・病因論(Etiology)、そ

1) E. H. Carr, *From Napoleon to Stalin* (London, 1980), p. 218. 拙訳『ナポレオンからスターリンへ』(岩波書店, 1984), 266ページ。

2) 本書と関連資料の入手について、ひとかたならぬご配慮をいただいた本学の伊代田光彦教授に深謝申し上げます。

うした原因論を多少とも含みこみつつ、革命の辿る経過の一般的な規則性を抽出しようとする「形態論」(Morphology)——の三つです。このうちもっとも盛んに行われてきたのはいうまでもなく第二の「原因論」ですが、もっとも手うすなのは第三の「形態論」です。多くの場合、革命の「形態論」がせいぜい革命過程の時期区分ていどの営みに止ってきたのは、著者もいうように、革命の全体を、とくに終末期までみとおすという作業は、革命の開始点に焦点をおく研究とくらべると、なんといっても心おどらせる魅力に欠けるからでしょうが、最初の打撃が社会をゆり動かしあと何十年もの期間にわたってつづくクーデタ・反乱・蜂起・反蜂起・復古・その転覆といった革命過程の「フルコース」をみないでは、革命過程の探究は「半面理解」にとどまらざるをえないはずです。

本書の最大の特徴は、これまで日が当たってきけなかったうらみのある革命過程全体について、その運動のモデルをつくろうと試みたこと、いわば「革命の形態学」の建設をくわだてているところにあります。「革命の形態学」はたんに知的好奇心をみたすだけのものとはいえません。そうした形態論をまっぴらしてはじめて、様々な革命が想像以上に類似したあゆみを辿るものだという、冒頭にあげたカーラの直観が裏打ちされるとともに、もろもろの革命過程が類似のなかに一つのはっきりした分岐を含むこともあきらかにされ、それをとおして、ある革命が何を達成したか、また達成しなかったかについて、生産的に論議するのに役だつ共通の土俵・あたらしい視野がひらけるはずです。

## 2

クレイチャー氏の中心関心はいうまでもなく「形態論」のモデルづくりにあるわけですが、氏はその前提として革命の類型論と原因論について一定の精練作業を遂行します。

まず革命の定義論・類型論は、従来数多く生産されてきたわりには、かえって混乱を招く類型づけにおわったり、現実の革命からいささか遊離した「理念型」の構成に終始したりして、

かならずしも生産的な概念がつくられてきたとはいえません。革命を「ジャックリー」「千年王国型反乱」「アナキスト型反乱」(いずれも原則として不成功におわる)「ジャコバン＝共産主義革命」「陰謀的クーデタ」「大衆的武装蜂起」(これは「ジャコバン＝共産主義革命」に向うものと「民族解放戦争」に向うものとに分岐することがおおい)の六つのタイプに分けるジョンソンの類型論<sup>3)</sup>は、前者の代表例といえます。かといって、革命とは「政治機構・社会構造・経済的所有物の管理・社会秩序をめぐる支配的神話等におきる大規模な基本的変化」である、<sup>4)</sup>と定義したからといって、現実の革命や革命類似の過程にたいする理解が大きくすすむともおもわれません。

そうした実状にへきえきしたブリントンは、定義の試みは放棄して、具体的な革命の比較・分析に力を集中すべし、と主張します。そうすることは、「定義に関する沢山の非生産的な論争を避けうる点からも甚だ有用である。(……)政治学の分野における著作者たちは、政治革命と社会革命との違いや、クーデタ、一揆、革命などの違いに頭を悩ましてきた。われわれとしては、形而上学的には幾分不誠実であるにせよ、われわれの取上げる四つの運動〔イギリス革命・アメリカ独立革命・フランス革命・ロシア革命〕は、普通に革命と呼ばれているのであるから、今の際またそう呼んでよいであろうと簡単に述べて、(……)面倒な定義の問題に深入りすることを避けたい」<sup>5)</sup>というわけです。

著者の提出する革命の定義は、ブリントンのように定義を試みること自体に懐疑的な立場に立つものにも一定の説得力をもちうるとともに、さまざまな定義の交通整理をするうえでも有用といえます。著者は革命の定義にあたり、主権国家内でおきる革命を「垂直的」革命、従属国

3) Cf. C. Johnson, *Revolution and the Social System* (Stanford, 1964).

4) S. Neumann, *The International Civil War*, World Politics, I, 1978-79, p. 2.

5) C. Brington, *The Anatomy of Revolution* (London, 1953). ブリントン、岡義武・篠原一訳『革命の解剖』(岩波書店, 1952), 28ページ。

表1 社会変化の類型的マトリクス

変化の方法	A どのように遂行されたか	平和的に	暴力的に		
変化の推進力	B 推進力の源泉	上・下・外国からを問わない	上から	外国から	下から
変化の範囲	C なにに影響したか				
	1 政府の行動	(特定のよび名なし)	(特定のよび名なし)	(特定のよび名なし)	「反乱」*
	2 統治にあたる人間	(特定のよび名なし)	「粛清」	(特定のよび名なし)	「クーデタ」
	3 イデオロギー(パラダイム)	「改革」(自発的な)	「改革」(押しつけられた)	「征服による馴化」	
	4 政治体制	「憲法的变化」	「クーデタ」	「同化」/「征服による隷属化」	「革命」
	5 社会・経済構造	「再建」(Reconstruction)	(特定のよび名なし)	「同化」/「征服による隷属化」	
	6 地理的領域	「割譲」	—	「国家間戦争」	「独立戦争」(「解放」)

\*) 多くの場合、「反乱」は1つの社会集団がおこすというニュアンス。「革命」は2つ以上の社会集団が参加し、長期的・野心的目標をもつ。蜂起は「流産した革命」を指すことが多い (Krejčí, p. 4)。このマトリクスにおける「改革」などの位置づけには、異論がありえます。

が支配国から分離・独立しつつ遂行するそれを「水平的」革命とよんで、モデルづくりの材料としてはもっぱら垂直革命を使用します。具体的には、15世紀のチェコスロヴァキアの「フス」革命、17世紀のイギリス「ピューリタン」革命、フランスの「ブルジョア」革命、ロシアの「ボリシェヴィキ」革命、トルコの「民族」革命、中国の「共産主義」革命の六つを対象にするのです。そして、表1のようなマトリクスをつかって革命を定義するわけですが、<sup>6)</sup> この表からでてくる定義は、「a) 下から、b) なんらかの暴力をつかい、c) 支配集団のみでなくイデオロギーや政治体制や社会・経済構造のすべてを、d) 短期でなく長期的・半永久的に変化させる社会変化が革命である」<sup>7)</sup> ということになります。ただし、ここでいう「下から」というのは、トップの権力集団なり支配的エスタブリッシュメントの外から、権力の位階制のなかの最

上層よりは下の層から、の意味であってかならずしも「底から」「底辺の階層から」を意味しないことは、革命がイギリスでは下院から、フランスでは三部会の第三身分からはじまった点から、あきらかです。

この定義を適用してみますと、ナチズムやファシズムには、革命のラベルは貼れないこととなります。<sup>8)</sup> ヒトラーは合法的に首相の座についたあと「上から」非合法に政治体制をくつがえしたわけですし(したがってクレイチャー氏のマトリックスでいうと「クーデタ」にあたります)、社会・経済構造の基本をナチズムがかえたとはいいいにくいからです。ムソリーニはたしかに「下から」政治体制をくつがえしはしましたが、かれの断行した「革命」はナチズムのそれと同様、長期的に制度化されて社会に根づくことはないまますみやかに消滅しました。この点はみのがせない特徴であり、ムソリーニの革

6) 「産業革命」「科学革命」「文化革命」等々は、パラダイム＝価値体系の変化という意味で広義の革命に入るものの、本書は、それら「比喩的な」革命はここでは対象にせず、特定の人間集団が多少とも暴力をつかって実行する「技術的な」意味での革命に話を限ることによって、定義化につきものの混乱をさせています。

7) Krejčí, p. 7.

8) 定義を避けて議論を展開したブリントンにあっては、ナチズムやファシズムも、定義ぬきのまま革命の一種ということになっています。「ムソリーニまたはヒトラーが(…)明らかに暴力的、非合法的に政権を獲得した現象」つまり「既存の合法的な議会を転覆した事実を革命とよぶことは自明なことであろう」(ブリントン、前掲書、330—31ページ)

命が「革命」の定義からはこぼれおちざるをえない所以でもあります。

さらに東ヨーロッパで喧伝された戦後の人民民主主義「革命」はどうでしょう？ これらのいわゆる衛星国革命は、ユーゴスラヴィアやアルバニアをのぞくと、いずれもソビエト軍の軍事的征服下に「輸入された」変動であって、ここでの革命の定義には入らないばかりでなく、むしろ民族解放戦争を伴いつつ遂行される革命＝クレイチャー氏のいう「水平的革命」、をちょうど裏返したかたちの社会現象ということになるわけです。

とはいえ戦後、東ヨーロッパ諸国の社会構造に革命的ともいえる変化がおきたことは事実ですが、そのことは、永続的で深刻な社会変化を引き起こすのは「革命」とはかぎらないこと、それどころか歴史上でもっともしばしば広汎な社会変化を引き起こしてきたのは革命以上に外国の征服や異民族の侵入であったこと、をあらためて想起させてくれるものというべきでしょう。本書の定義にしたがうかぎり、戦後の東ヨーロッパにおきた社会構造の永続的変化は「垂直的革命」でも「水平的革命」でもなく、それぞれの国の伝統とは多少とも異質の社会構造の「征服による移植」ということになりました。

クレイチャー氏は、革命「原因論」についても、革命を引き起こす複合的機能不全なり複合的矛盾なりとよばれるものの主要な要素をかなり明快にモデル化しています。クレイチャー氏は革命を引き起こす多様な要素を、それぞれの要素の存在を明確なかたちで指摘した主役の名をとって、つぎの六種に大別しています。<sup>9)</sup>

1)「ウェバー的不均衡」(Weberian Disproportion).——たとえばフランス革命前夜のブルジョア層が、富はもっているのに生活のスタイルや社会的威信といった点では貧しい貴族にも及ばないためフラストレーションを蓄積させる、といった状況がこれにあたるわけで、ある社会層が「社会的ステータスにおいて富・権力・威信が一致せずちぐはぐになっている状況」と

著者は定式化しています。極貧層が保守的支配者を支持し、不可触賤民がブラーマン層をたやすく受け入れる反面、社会的には相互に近い位置にある社会階級の間でむしろ革命的抗争がおこりやすい、といった歴史上まみられる現象<sup>10)</sup>も、ウェバー的不均衡の一表現といえてよいわけです。

2)「マルクスの矛盾」(Marxian Contradiction).——生産力と生産様式の矛盾、つまりテクノロジーの上ではより高い生産力を発揮できる可能性が与えられているのに社会・経済制度がそれを制約しているという矛盾。その結果生じる、既存の生産様式を守ろうとする階級とそれを変えようとする階級との矛盾。以上の二つがここに含まれます。

3)しかし、それらが出そろっただけで革命がおきるわけではありません。どのように耐えがたい状況がつづいても、その状況が不正であるという目覚めなり「大状況の認識」なりがおこらないかぎり革命的状況は生れないからです。一つの社会制度を不正であり「もはや正当化できない」と認識させる触媒となるあたらしい正義の概念が、旧秩序の説いてきた正義の概念と対立しはじめるとき、そこに生じる状況が、「アリストテレスの矛盾」(Aristotelian Contradiction)です。

4)トックヴィルがその著『アンシャン・レジームとフランス革命』のなかで指摘している、期待とじっさいの獲得物とのあいだの落差からくる剝奪感も、革命を発生させ革命を推進する一要因となります。この「トックヴィルの不均衡」(Tocquevillian Disproportion)は、支配層が、期待される「倫理的権威」の水準を裏切るような腐敗と墮落におちこんでいることが明るみにでた場合にも、作動します。おしなべて現在の耐えがたい状況は支配層に責任がある、と人びとが悟った瞬間に生じる「期待と獲得物のギャップの突然の拡大」、これがトックヴィルの指摘する革命の要因です。

5)支配エリート<sup>1)</sup>の倫理的権威が下落する反面、カウンター・エリート<sup>2)</sup>のそれが上昇すると

9) Krejčí, pp. 11-16.

10) プリントン、316ページ。

きに生じる対比状況＝「パレートの対照」(Paretian Contrast) も革命の要因となります。ヴィルフред・パレートの「ライオンとキツネのたとえ」でいえば、ある社会の支配層のなかに十分な数のライオン＝有能で決然たる意志をもつ人物がおり、かつ下の階層が生み出すポテンシャル・ライオンたちにも上昇して支配層に参入できる道が開かれているかぎり、革命はおこりにくいといえます。ところが、ライオンが狡智やひそかな術策を得意とするキツネにとってかわられ、下層のライオンもまた上昇の道を閉ざされたときには、下層のエネルギーなライオンたちの自己主張が、あるいはクーデタ（じぶんだけが上昇したいとき）、あるいは反乱（自然発生的大衆運動を率いたとき）、さらには革命（あたらしい社会哲学のパラダイムを引っさげて社会体制そのものをかえようとするとき）を引き起こすこととなります。

6) そして、これは往々にして革命が進行しはじめたあとの推進力となる要因ですが、強力なイデオロギー的信念なり熱情なりをもつ集団がそうでない側を圧倒するという「ハルドゥーン的対照」(Khaludunian Contrast) も、革命推進のみのがせない一要素です。14世紀のイスラム学者として聞こえたイブン・ハルドゥーンは、宗教こそたんなる団体精神をしのぐ有効な社会的・一体性・献身・戦闘性を達成しうる力であることを強調したといわれますが、革命勢力の側がほとんどの場合にアンシャン・レジーム側をしのぐ「ハルドゥーン的」エネルギーを具えていたことはたしかであり、ピューリタン革命のさいのクロムウェルのニューモデル軍をはじめとして、歴史は革命を推進した熱情的戦士の実例にこと欠きません。

クレイチャー氏が検証例につかう六つの革命には、これら六つの革命要因＝社会の崩壊を招く多元的機能不全要因が、程度の差はあれどの場合にもみてとることができますし、今世紀に入ってからおきたメキシコ、イラン、エチオピアなどの大型の「垂直革命」やキューバなどいくつかの革命にもおなじような一連の要因を検出することができるはずです。16世紀のオランダ

革命や18世紀末から19世紀はじめにかけておきたアメリカ大陸の諸革命は、大国スペインやイギリス等からの分離・独立の戦争と平行して遂行された「水平革命」ですが、これらの革命についても同様のことがいえます。

もっとも、六つの原因のうち、マルクスの矛盾はかならずしも明瞭に看取できるとはかぎりません。とくにマルクス主義者のこのむ「階級闘争」的要因は、クレイチャー氏の六革命のなかでも、チェコのスス革命やトルコ革命の場合には前面にはでてきませんし、それがかなり重要な役割を果たしたといえそうな場合にも、革命勢力と反革命勢力をわける分割線といわゆる階級対立とは一致しないことの方がむしろ常態といえます。ロシア革命のなかで、ボリシェヴィキ党とブルーカラーの労働者の利害の重なりあう時期がきわめて短期間にとどまるのはその好例です。その点、おなじマルクスの矛盾のうちではより根本的な矛盾といえる生産力と生産様式の間のそれの方が、検出は容易です。時代おくれの社会構造が、外国からすすんだテクノロジーを導入する障害となっているという痛切な認識が、たとえばトルコや中国の革命で欠くことのできない要因になったことは明らかです。

それにくらべたとき、六つの革命をつうじて一貫して強烈に作用しているのがアリストテレス的対比だとしますと、トックヴィルの不均衡もまた、支配エリートの倫理的権威への期待と実態の格差にたいする憤激というかたちで、革命の動機づけに大きな役割を果たしており、その点はチェコ・イギリス・フランスの諸革命においてとりわけ顕著です。

しかしながら、以上の六要素が出そろっただけでは革命がおきるとはかぎらず、革命の原因像を完成するにはいくつかの付加的状況が欠かせない、とクレイチャー氏は指摘します。<sup>11)</sup>

すなわち、複数のことなる社会集団が、革命の〈爆発〉や革命の〈うち固め〉といった決定的瞬間に協力してうごくこと、これが革命成功のなによりの前提条件だということです。たしか

11) Krejčí pp. 193-95.

に、ローマ教会による教会支配とこれと結びついたゲルマン系の王朝をたおして15世紀のラテン・キリスト教世界に前例のない宗教的寛容の王国をうちたてたチェコのス派革命は、貴族の軍事専門家としての能力と王領の市民の武器製造技術と農民のエネルギーが一つに結合することによってはじめて可能になりました。イギリス革命やフランス革命の中央突破を可能にしたのも、前者の場合は貴族の一部やヨーマンとロンドン市民のあいだに同盟が成立したからであり、後者には若干の名門貴族・聖職者・第三身分の人びとにたいしてパリ市の大衆が支持をよせたからでした。

これら複数集団の決定的瞬間における提携が成立するのは、一つには革命側の諸集団がそれぞれにことなる不満といかりとを権力の座にある体制へと収斂させるからであり、いま一つはアンシャン・レジームにおいて、体制側から反体制側への「インテリの逃亡」がおこるとともに二重権力＝二重主権の発生というかたちで権力の分裂がすすむからです。本書があげる六つの革命はすべてその点でも共通していますが、成功した革命の指導部の重要部分がアンシャン・レジームから「脱落」して革命側へとリクルートされたインテリで成立つことに不思議はありません。既存権力の思想的な基盤・その機能の仕方と弱点をしり、広汎な社会集団に訴えうる対抗思想を打ちだすのはかれらの得意とするところだからです。なお、既成秩序を痛撃するそうした、「非難産業 (Blame Industry)」(ジャン＝フランソワ・ルヴェル) の担い手たちが革命の一翼を担うにとどまらずその中心的存在となる、いわばインテリ主導型革命の極限型はロシア革命といえますが、ボリシェヴィズムのパワー・エリートたちがほかならぬ「書記」をもって権力単位の最高位階とするならわしには、ボリシェヴィキじしんが意識しているかどうかは別として、王を倒して権力の座につきえた書記＝インテリの陰湿な凱歌の声がこもっているといえなくはありません。

こうしてクレイチャー氏によれば、a) 二つ以上の社会集団が、じぶんにふさわしい地位(と

考えるところ) とじっさいの社会的地位とのギャップ、そして／あるいは支配集団の倫理的腐敗に憤激し、b) 経済条件の悪化や政治的抑圧をうけてそのいかりを増幅し、c) 社会正義や正統性のあたらしい解釈によってそのいかりを正当化する一方、d) すべての責任を現体制に集中して非難を浴びせ、e) 正当化のためのイデオロギーを世に広めるとともにそのプロモーターを防衛することを可能にする一定の社会的権力を具えた制度＝反体制側の権力基地をふまえて、f) そうした制度が存在しないときにはそれをつくりだして、g) ふつうは政治にかかわることを好まない大衆を政治的に活性化させたところへ、h) 革命指導者の殉教とか弾圧強化といった具体的な「引金」が作動したときにはじめて革命が発生する——ということになります。クレイチャー氏が社会的文脈から析出している以上六つの要因とそれを活性化させる付加要因とを、革命を準備する長期的な先行条件や短期的な促進要因なり瞬発的な発火剤なりといった時系列的な要因と組合わせてマトリクス化するならば、たぶん遺洩のない原因論の骨格ができあがるはずです。

### 3

こうしてクレイチャー氏は中心主題である革命の形態論づくりにうつり、さきにあげた六つの垂直型革命——チェコ、イギリス、フランスのいずれもラテン・キリスト教世界でおきたという意味での西欧型革命とロシア、トルコ、中国の三つの非西欧型革命——を原料にして、革命形態論のクレイチャー・モデルを提出します。<sup>12)</sup>

氏のモデルづくりをみちびく手法は明快です。革命の経過中、権力の座が様々な革命勢力の間をどのように移動するかに着目し、時間の経過とともにこのシフトが辿る経路から、以下にのべるような一定の規則性をもった軌跡、一つの共通のリズムを抽きだすのです。

革命が、はじまったとたんに抑圧されることなく開始点をこえて生きのびたとき、革命勢力

12) Ibid., pp. 11-20, 196-200.

はプログラムと利害を異にするいくつかの集団に分れて激しく対立しはじめます。この対立が急進派と穏健派といった二分法におさまり切らないことは常識ですが、氏はそうした「革命における政治勢力のスペクトル」として、一般に、革命勢力側の「右派・中道派・左派・極左派」の四集団とこれにアンシャン・レジームの復活をのぞむ反革命派をくわえたあわせて五つのグループが検出できるとし、これらのグループが対立抗争・合従連衡する過程でおきる権力の座の移動は、多くの場合、出発点で革命の中道派がかかっていた辺りにおちついて革命は終末を迎える、と結論しています。

終末点となるのは、「革命をおこした主要な争点が鋭さを失って社会的論争の中心であることを止め、他の争点が社会の関心事になったとき」と定義されており、この定義に即したクレイチャー・モデルにあっては、革命過程の持続期間は往々にして半世紀以上に及ぶ結果になっています。この点は、ブリントンらの比較的短期におわる革命のモデルとは大いにちがうところです。もちろんこの長さは、なにを主要な争点とみるかの函数となるわけですから、論者の立場によって大きくちがいが発生しうるわけですが、なにをもって革命の主要な争点とみるかを規定してかかるかぎり、議論は不毛な水かけ論にはおならずすむわけで、クレイチャー氏の定義は一見すると単純すぎるように見えるものの、じっさいの場ではけっこう有効性を発揮しうる規定だともおもわれます。

こうして、時間の進行を横軸にとり権力の座が左右のいずれへ振れていくかの移動ぶりを縦軸にとって、権力の座が辿る軌跡を描きだすとき、そこにはつぎにしめすような10～12の段階からなる共通のリズムが抽出できる、というのがクレイチャー氏の形態モデルです。

革命に先立つ長い期間の改革運動、これを氏は〈開始〉(Onset) 段階と名づけます。この段階でおきるもっとも重要な現象が「インテリの逃亡」です。成功した革命は、きまって革命指導部を構成する要めの部分がアンシャン・レジームから徴募された実務インテリやアンシャン

・レジームへの参加を拒んだ文化インテリから成るものですが、それはすでにふれたように、かれらこそ既成秩序の思想的土台とその機能の仕方をしっており、したがってその泣きどころを直撃しうるようなイデオロギーやプログラムを編成し、広汎な社会集団の不満を組織化・活性化するのに不可欠な存在だからです。

はじめた改革運動（ないし革命運動）は、その推進者を防衛しかつ新しいイデオロギーを広布していくよりどころとして、体制の内部に多少とも安定した権力基盤をみつけ出します。チェコのフス派の革命におけるプラハ大学、イギリス革命のさいの下院とロンドン市議会、フランス革命のときの三部会第三身分等々がそれにあたります。こうした利用可能な多少とも合法的な制度が体制の内部に存在しない場合には、革命勢力はなけなしのところからあらたに権力基地を創りだすことを余儀なくされます。ロシア革命のさいのソビエト、トルコの場合の権利防衛連盟 (Association for the Defence of Rights)、中国の人民解放軍、ポーランドの自主労働組合「連帯」といった組織がそれにあたります。こうして運動は革命勢力が権力基地を確立するという〈制度化〉(Institutionalisation) の段階に入るわけですが、〈制度化〉すなわちレーニンが「二重権力」の発生と名づけた事態は、なにもロシア革命の専売特許ではなく、いずれの革命にも共通してあらわれる事態であることがわかります。著者によれば、以上が革命の第一期であり、ここまではどの革命もそっくり共通したパターンをたどります。そして革命パターンの分岐は、これ以後終末にいたるまでの第二期におこってくるというわけです。

〈制度化〉した運動にたいして政府が〈抑圧〉(Compression) にのりだしたとき、すでに時期が遅すぎたりそれが断乎とした破壊力を発揮できない中途半端な弾圧にとどまった場合には、運動が〈爆発〉(Explosion) して（これが狭義の意味での革命の開始点です）、アンシャン・レジームを打倒しますが、革命陣営はまもなく分裂して革命過程は〈変動〉(Oscillation) の局面に入ります。多様な革命集団が権力の座を

めざして競りあいを開始し、権力の座はほとんどの場合急速に左へ移動していきます。

レーニンの「敵のだれよりも左へ」という有名なスローガンは、この急速な左傾過程のなかで勝利する秘訣を的確にとらえています。その意味でも、「臣民の意見を軽蔑」(A・ウラム)し大衆の自然発生的行動を忌避したはずのレーニンがあえてこの時期に『国家と革命』という名のアナーキスト的パンフレットを執筆した狙いが、爆発する極左派のエネルギーを調達し〈変動〉局面を最大限に活用することにあつたことはあきらかといえそうです。こうした左への変動(文化大革命にみるように〈爆発〉の時点からかなりおくれて発生することもあるが、おしなべて2～3年間持続する)を巧みに利用しつつ、革命陣営の内部抗争が頂点にたつたところでもっとも有効に軍事力を動員することのできたグループが権力の座につき(あるいは国の心臓部を占領して)、〈変動〉過程を〈中断〉(Intercept)します。こうして革命過程に重要な転換がはじまります。

勝利した集団は、革命独裁政権として反革命派をふくむ他の各派への〈しめつけ〉(Tightening)にのりだしますが、そのさい革命政権——ほとんどの場合に革命左派——のもっともはげしい攻撃にさらされるのが、より急進的な要求をかかげる極左派であり、革命政権の「左の敵」となった極左派は結局壊滅させられるのが通例です。革命の経過をつうじて革命各派が多少とも権力の座につくチャンスをもつのに引きかえ、極左派だけは、はじめから革命政権につかいてられて舞台を去る運命にあるわけです。ただし、極左派のプログラムだけは、ずっとあとになって——場合によっては一世紀かそれ以上もあとに——全くちがった状況のもとで再現し、結実することになります。挫折におわってはいえるものの、ポーランドの「連帯」が1921年のクロンタットの抵抗の、国こそちがえ60年ぶりの再生であることはあきらかです。

〈しめつけ〉による極左派の切りすてとともに、革命政権はその他の反対派を無力化させ抵抗の芽を断つために例外なく行政的な監視機構

を拡大し、場合によっては革命前を上まわる強大な強制手段を新設します。権力を確保すること、が革命政権の第一の関心事となり、革命の原理と理想の多くが衰退し変質しはじめます。そのさい革命独裁政権は、政権を転覆されないため、あるいは外国の干渉をはねかえすため、往々にして隣りあう国ぐににむけて革命の〈膨張〉(Expansion)をはかりますが、これによって一段と力を消耗し、内向き・右傾化の方向をつよめることになります。〈逆転〉(Reversal)のはじまりです。<sup>13)</sup>

ほぼ共通した過程をとってきた革命の道程に明白な分岐が生じるのは、ここからです。すなわち〈逆転〉のすすむ過程で〈復古〉がおきかどうか、いいかえると、分裂していた各派が同盟を組んで革命政権をくつがえすか、それとも革命政権が反対各派を無力化するためにためらうことなく復古的政策をとって自派の支配を安定させることになるか、の二つのパターンに岐れるのです。

第一の、正式にアンシャン・レジームの復古がおきする場合。そこでは革命右派と反革命派のなかの改革派との提携＝〈復古妥協〉(Restoration Compromise)によって逆転が進行し、その過程でアンシャン・レジーム派が〈復古圧力〉(Restoration Pressure)を強化して、ついには旧体制をよびもどします。ここに及んで、革命右派は復古派と手を切り、一転してのこった革命各派——原則として中道派——との提携に転換することを余儀なくされます。こうして成立する「おくれてやってきた革命家たち」の同盟が、復古体制を排除して権力の座をほぼ革命中道派の辺りに引きもどし、そこで革命の成果を安定させるのです。

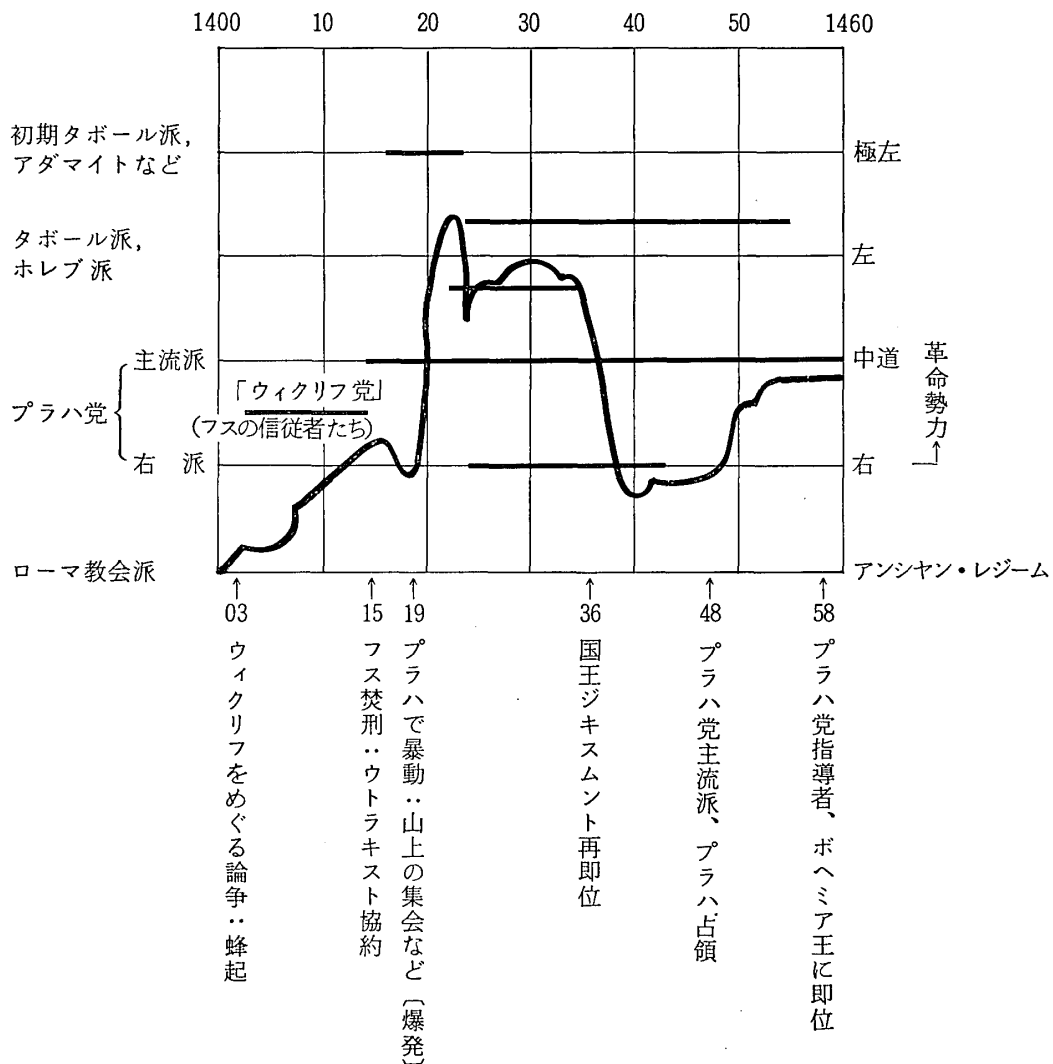
ピューリタン革命の幕切れにいったん王位に

13) 歴史のなかで反覆されるこの反転現象とそれがもたらす負の遺産の巨大さに目をつむらないかぎり、つぎのようなベシミスチックな洞察を否定することはできずまい。

「革命が果す真の機能は権力の更新・強化である。革命を、自由の精神が圧制にたいして発揮する反応として歓迎することを、止めようではないか」。(Bertrand de Jouvenal, *Power, The Natural History of its Growth* [London, 1952], p. 187, quoted in Krejčí, p. 234)



図1 チェコ革命のパターン



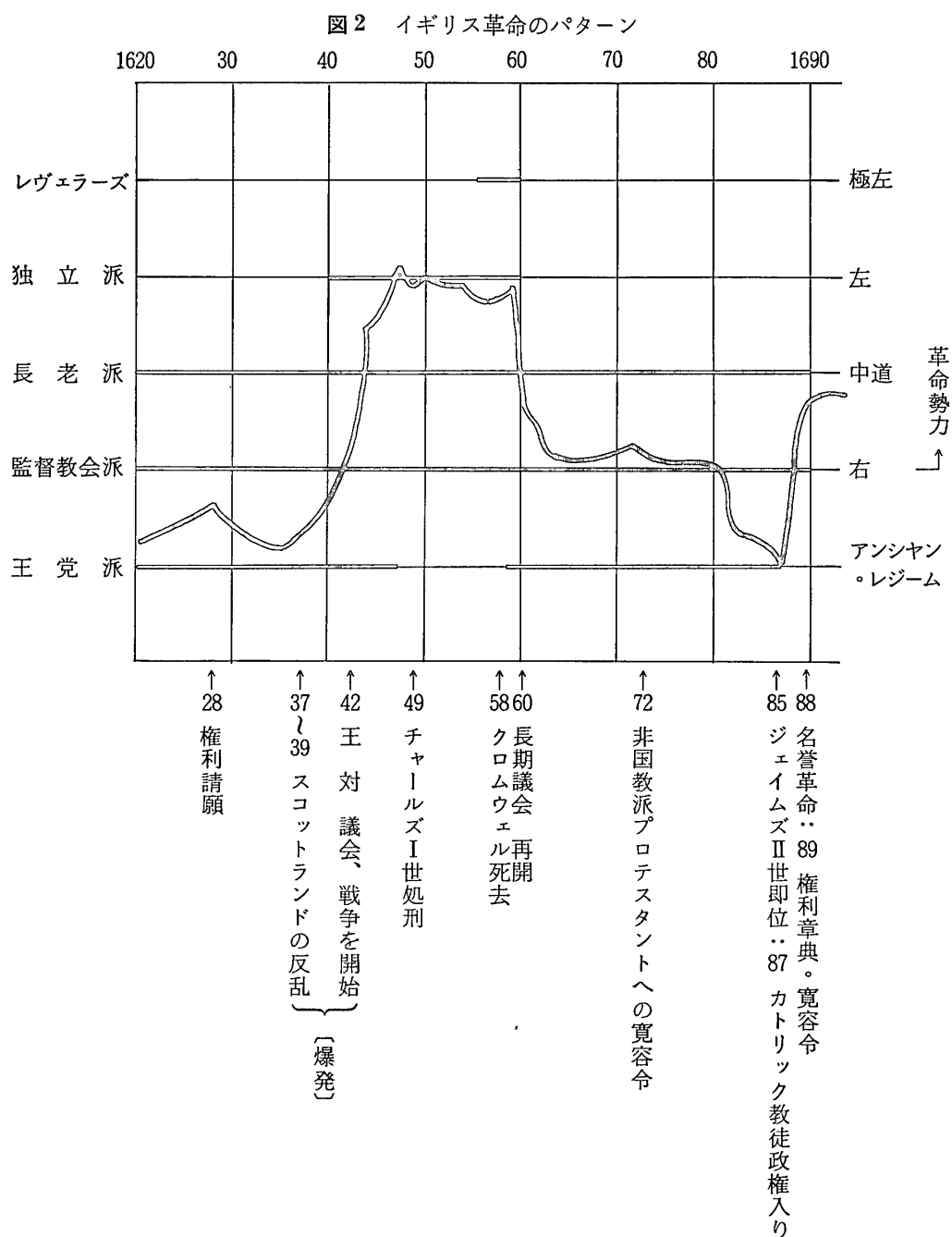
太い横線は、多少とも「制度化された」各派勢力の存在をしめす。曲線は権力の所在とその変動を概略的にしめし、特定の場合には、個々の集団の権力の及んだ地理的範囲をしめす。  
(Krejčí, p. 35)

復歸したジェームズⅡ世が、カトリック教徒の復権を強行しようとして国教徒の王党派から全面的抵抗をうけ、結局はオランダから姉の夫である新教徒のオレンヂ公ウィリアムを招いてみずからは退位せざるをえなかった経過は、このケースの典型例であり、その結末が「権利の章典」と「非国教徒プロテスタントへの寛容令」等を記念碑とする「名誉革命」とよばれるのは周知のところ。チェコ、イギリス、フランスの西欧型三革命はいずれも一種の名誉革命をもって終わっており、クレイチャー氏のいうとおり、名誉革命＝〈復古排除によるうち固め〉(Consolidation Overthrow)を終止符とする革命過程がこれら三革命には共通してみとれます。

これにたいして第二のケースは、同一の革命政権が権力の座を占めつづけ同一の革命的レトリックを使いつづけながら、なしくずしに旧体制のいくつかの要素を復活させて政権を安定させていくパターン、つまり〈復古的措置〉(Restorative Measures)をもって〈うち固め〉(Consolidation)がおこなわれる場合です。復古的政策がとられる期間は往々にして長期間にわたりますが、ロシア、トルコ、中国の非西欧型三革命は多少ともこの道程をたどります。

こうした形態論上の分岐はどこからおきるのか。それはクレイチャー氏のいうとおり、<sup>14)</sup> 革命

14) Krejčí, p. 214.



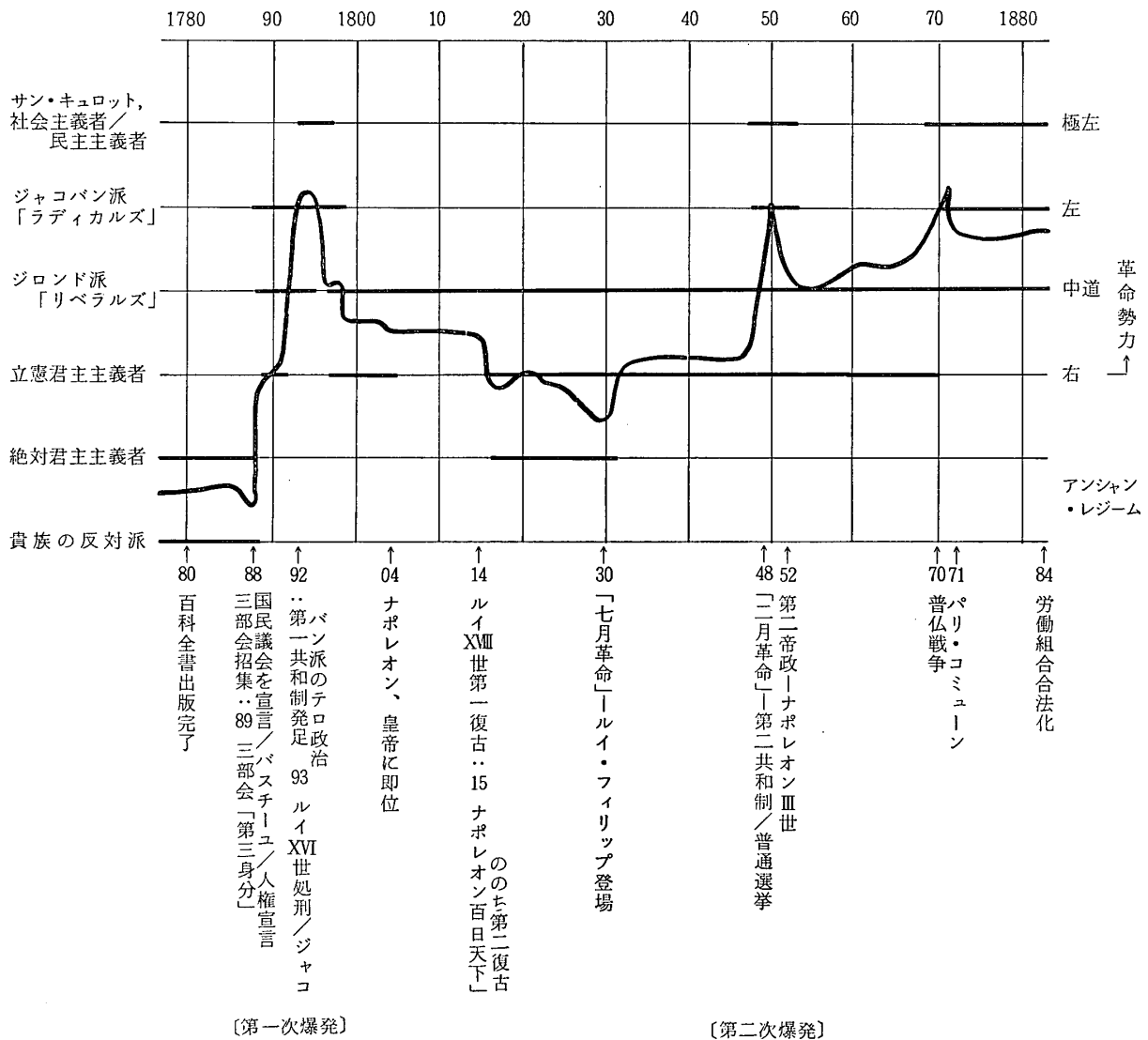
太い横線は多少とも「制度化された」各派勢力の存在をしめす。曲線は権力の座の移動を概略的にしめす。  
(Krejčí, p. 67)

政権によっては完全に除去できないところまで多元的制度が根づいている社会と、そうでない社会とのちがいがらくるものにちがひありません。多元的制度がないにひとしく〈復古妥協〉のおきる余地のない社会では、政権を獲得した集団がそのまま伝統的な、しばしばナショナリストティックな政策に転換して権力を維持することになります。これに反して、多元的伝統がぬきがたく定着している社会では、革命独裁政

権による〈しめつけ〉過程そのものが不徹底におわらざるをえないため、復古をもたらすような革命右派とアンシャン・レジーム内改革派の歩みより、それをくつがえす革命中道派と革命右派とのあたらしい連合、といった流動的な権力の再編成が可能になるわけです。

このように六つの革命のなかの西欧型と非西欧型の二種類の革命の辿る経過のちがひには、両者を分ける社会類型上の底深い差違が反映し

図3 フランス革命のパターン

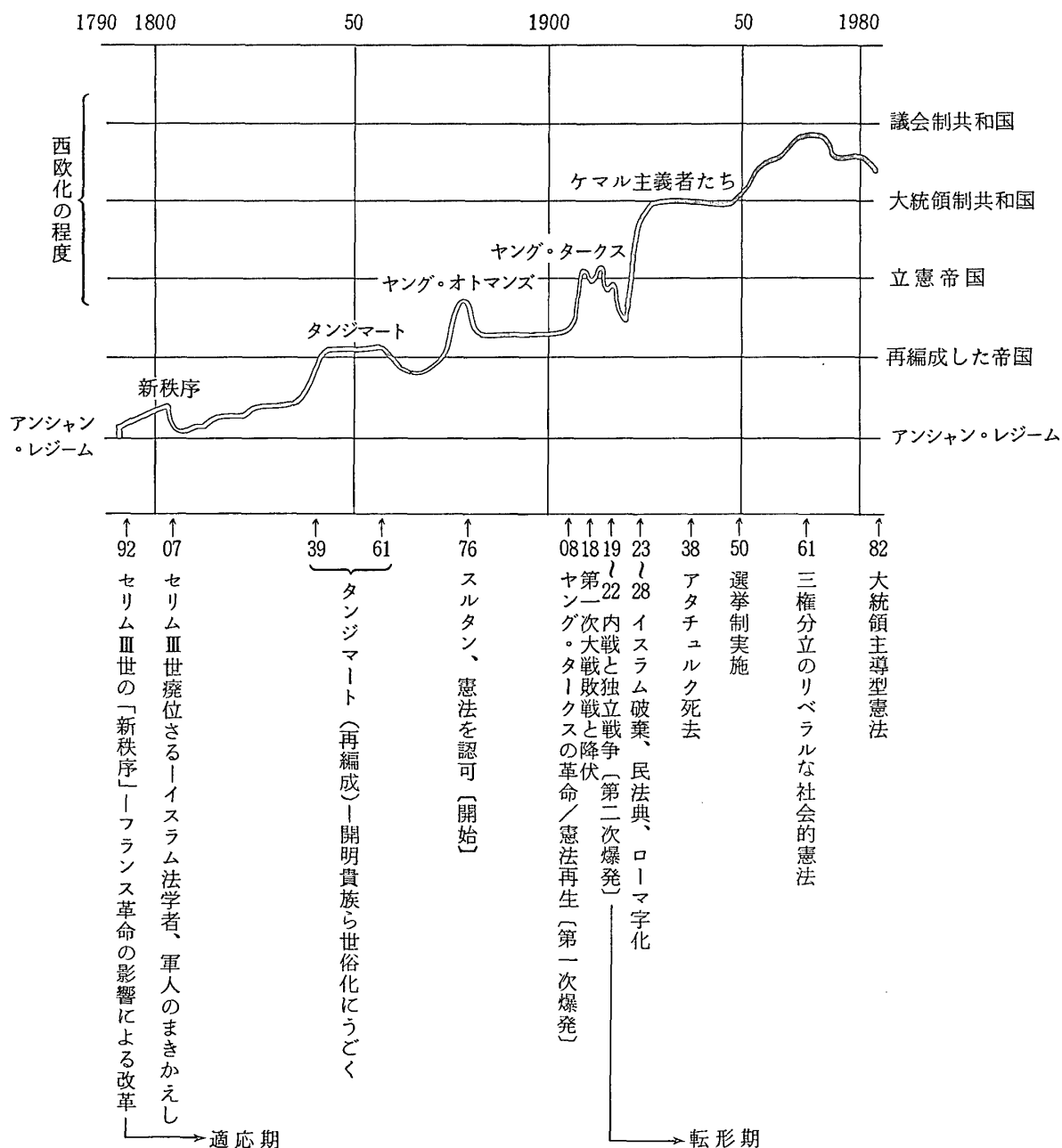


太い横線は多少とも「制度化された」各派勢力の存在をしめす。曲線は権力の座または政策の移動を概略的にしめす。  
(Krejčí, p. 83)

ています。時代こそちがえ、革命が勃発したときにはどの社会もいずれも農民が圧倒的な比重を占める農業国であり、程度の差はあれ封建的な社会関係をのこす点で共通していましたが、チェコなど西欧型の三社会の場合には、教会や身分制議会といったそれぞれに一定の権力をもった複数の制度が存在し、それが自治権のつよい王領都市や大学などと互いに競合・補強しながら君主による絶対的支配の達成を制約していました。絶対主義時代のフランス国王ですらついには三部会を開会せねばならなかったところに、そうした多元性の存在がくっきりとあらわれています。これにたいして、ロシアをは

じめとする非西欧型の三社会では、君主あるいは家父長的な絶対主義（ここではふつうに使われる意味ではなく強力な一元的政治支配というほどの比喩的な意味で使っておきます）が支配しており、そこでの革命集団は、すでに存在する制度を既存権力に対抗する権力基地として利用することのできた西欧型社会の革命勢力とちがって、よるべき権力基地を創りだすことから始めなければならませんでした。復古から名誉革命にいたるというプロセスの欠落とならんで、この事実もまた、これら非西欧型社会の多元性の欠除を物語る今一つの指標であり、クレイチャー氏はこの点を指摘することもわすれて

図4 トルコ革命のパターン



曲線は権力の座の移動を概略的にしめす。(Krejčí, p. 149)

いません。

13, 14世紀にはじまる西欧型身分制国家の多元的構造は、いまふれたとおり、革命によって抹殺しきれようような脆い存在ではありませんでした。それは、現代民主主義の基本的な構造とかんがえられている議会制となっていたたかに生きのびているのです。選良をもって国民の「代表」とする議会制民主主義は、元来は身分制社会のなかで名望家の支配をうけ入れていた

貴族主義の原理にはかならないのです。<sup>15)</sup> これに反して、家父長的絶対主義体制は、一度くつがえされると、別の種類の絶対主義にたやすく席をゆずる羽目になりがちで、非西欧型三革命の場合にも、革命後に登場したのはいずれおとらず高度に中央集権的でイデオロギー志向の強い政党による絶対的支配でした。

15) 福田敏一『近代民主主義とその展望』(岩波書店, 1977年) 131—35ページ。

西欧型社会の多元的構造は偶然の産物ではありません。政治世界の多元性はラテン・キリスト教世界が早い時期から獲得した本質の一つであり、そこでは権力がシーザーの世界と神の世界、俗権と教権の二つの世界に分割され、前者の世俗権力はさらに社会的身分の異なるいくつかのヒエラルキーへと分裂して相互に拮抗してきました。もっとも、非西欧型三社会にしても、君主の絶対支配を正当化する教義そのものが君主の行動を多少とも抑制し、専制に梃をはめてきたのはたしかです。君主に仕える中国官人の強力なネットワークやオトマン・トルコでスルタンの諮問にあずかった神学者の集団が、君主の権力にたいする一定のカウンター・バランスになったのも事実です。しかしながら、たとえばロシア正教の神父は、ツァーリにたいする神の思寵をローマ法王ほど公然と否定する権威をついにもちえませんでした。全体として非西欧社会は、王権から分離・独立したカトリック教会のような制度を欠き、多元的な権力分布をゆるす組織上の枠組をもつことができなかったのです。オトマン・トルコのスルタンはムスリムの<sup>カリフ</sup>の教主をもかね、中国の天子は天にのみ責任を負い、ピョートル大帝いごの皇帝権力には理論の上でも制度の上でも事実上なんの制約も存在しませんでした。

つけ加えておきますと、こうしたちがいは、西欧型と非西欧型の二つの型の革命に、原因論の点でもちがいをもたらせています。クレイチャー氏はそのちがいに「同一文明間型革命」と「異文明間型革命」という命名を与えています。が、このちがいはむしろ「内発的」と「外発的」と形容する方が適当かもしれません。多少とも多元性をもった政治社会で遂行された西欧型の革命は、社会の内部に生れた異議申立てや価値観の組みかえが、既存の制度のいずれかを権力基盤として利用しつつ推進されたという意味では、すぐれて「内発的な」革命といえます。ところが、非西欧型三革命は、基本的にはいずれも異なる文明との接触に刺激されて醗酵したという点でも、外国との戦争が政治体制の中に生みだす裂け目を利用してよるべき権力基地をつ

くりだしたという点でも、まさに「外発的」革命とよぶのがふさわしいとおもわれるのです。

それではつぎにクレイチャー氏が素描している六つの革命の形態論的グラフを列挙し、ロシア革命を中心にしてごく簡単なコメントをそえることで紹介をおわることになります。

#### 4

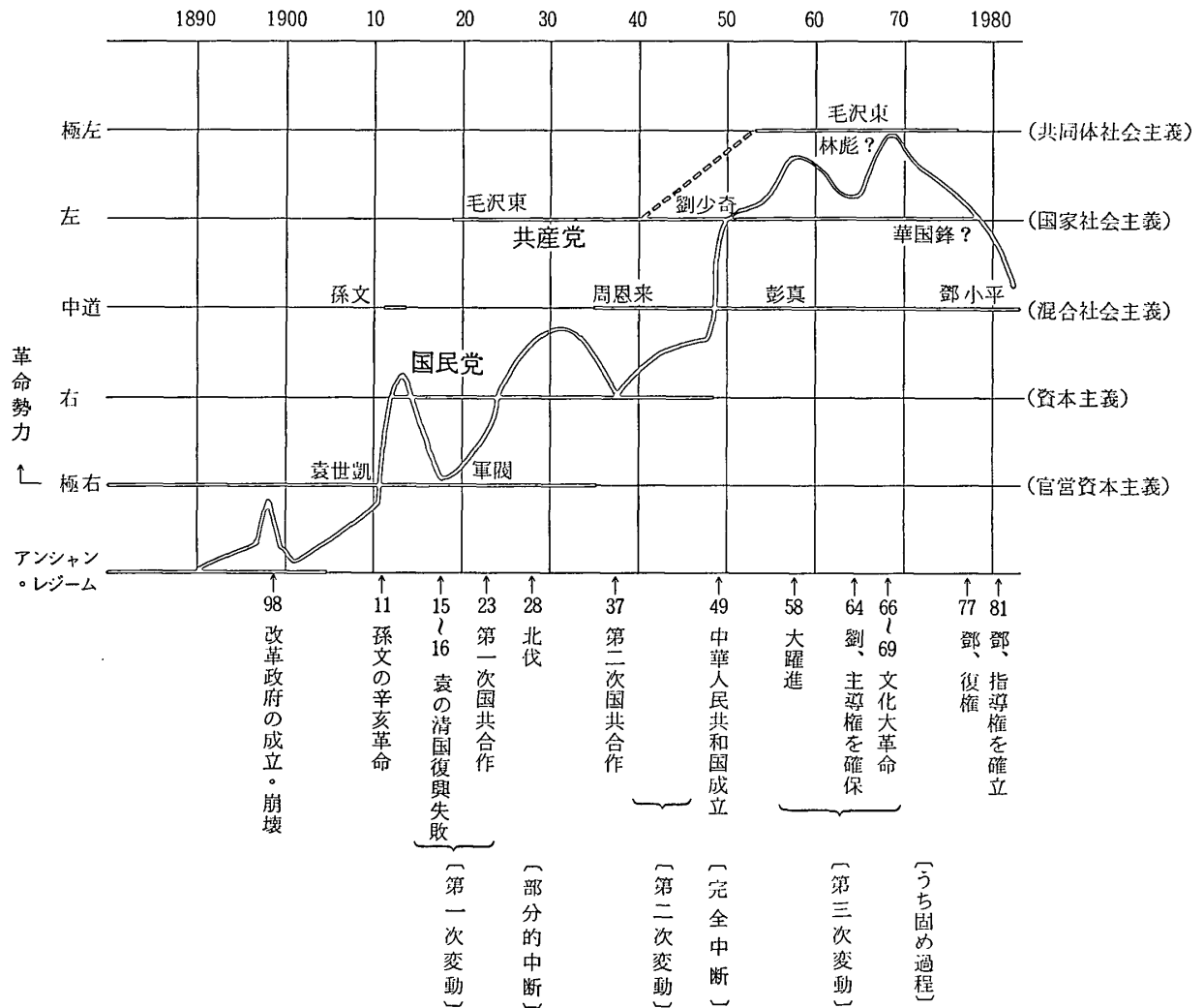
この本のもっともユニークな部分といえる形態論的グラフは、時間の進行（横軸）とともに権力の座が辿る政治的立場の左右への移動（縦軸）を図示したのですが、軌跡の振幅をきめているのはあくまで著者のくだす質的な評価です。それは、革命過程の理解と比較を助けるための「イメージ・グラフ」とでもよぶべきものであって、なんらかの計量的な分析結果を表示したものではまったくありません。<sup>16)</sup>

ローマ教会に属する腐敗した聖職者たちに俗人の救済権はないとするウィクリフやフス、かれらの信徒者たちが推進したチェコのフス革命は、いわばプロト・プロテスタント、プロト・ブルジョア、プロト・民族主義革命といえますが、図1にみるようにいわば革命過程の標準的カーヴを描いて終結し、はやばやとラテン・キリスト教的世界に前例のない宗教的寛容を達成しました。革命各派のうち極左派の「兄弟団」だけは公式には承認されなかったものの、フス派左派の貴族たちに保護されて生きのびることができ、フス革命いご、チェコ社会では宗教のちがいは主要な社会的対立であることを止めました。

フス革命はまた、カトリックを奉じるゲルマン人の王家を立ちさらせ、かわってボヘミア人をチェコの統治者に選んだ点では「ナショ

16) 以下はそうしたグラフ化を試みた著者の弁です。  
「言葉だけで分析したのでは比較が明確に浮彫りになりにくい。統計数字にたよって結論を出すと、分析が若干の経済的・人口学的指標に還元されてしまうか、革命の概念を政治的側面だけに狭めてしまうことになる。両国の中間をいくことの危険はよくわかるが、それはあえて犯すに値するリスクと信じる。(……) えらばねばならないとき、わたくしは理論のエレガンスと概念の厳密さより事実の分析という凸凹道をとる」 Krejčí, pp. 20, 21)

図5 中国革命のパターン



太い横線は多少とも「制度化された」各派勢力の存在をしめす。曲線は権力の座の移動を概略的にしめす。  
(Krejčí, p. 179)

ナルな」革命でもありました。

イギリス革命の主要成果は、君主専制体制確立のくだりが完全に敗北し、かわって個人の私有権が王位についたこと、比喩的にいえばホッブスとロックが闘ってロックが最終的勝利をおさめた点にあるともいえましょう。これ以後、イギリスは企業家精神と経済成長の飛躍的発展の時代に入っていきますが、こうしたイギリスのピューリタン革命とフス革命は、持続期間がおよそ60年とほぼ一致するだけでなく、復古につづいてそれぞれの名誉革命が行われるところまで相似形といえるほど似かよったパターンをしめています。

これにくらべ、フランス革命は、パリ・コミ

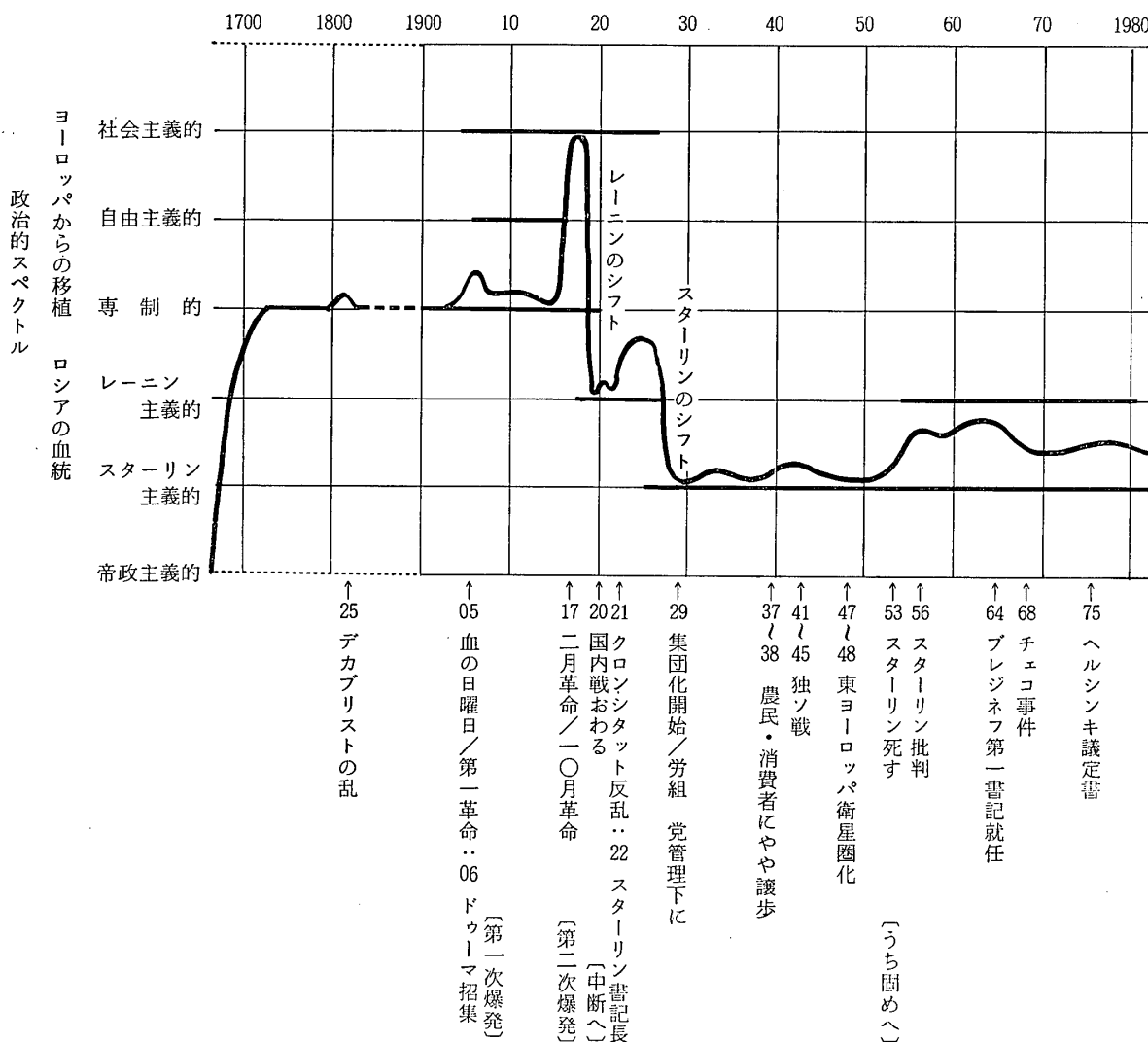
ューンをくぐりぬけて最終的に所有階級の支配と共和制を確立するまでに、チェコやイギリスの革命よりはずっと長い一世紀以上の期間を経過しました。クレイチャー氏によれば、これは前二者の場合には一回ですんだ基本的な革命のサイクルを、フランスの場合には二回にわたって反覆せねばならなかったことからきていますが、そうなった理由についてクレイチャー氏は、フランス革命にあっては、はやくから急進的左派が「ブルジョアジーにたいする労働者の権利確保」という革命の「第二戦線」をひらいていたためであり、したがってそこでは労働者の団結権公認をもって終わる革命の第二ラウンドが必要とならざるをえなかったのだ、と意味づけていま

表2 ロシア革命における政治勢力のスペクトル

西側の概念によるスペクトル ——革命「前」からみた視点		ロシアの伝統に即してみたスペクトル ——革命「後」からみる視点
反革命勢力	「黒百人組」，白軍など	同左
革命勢力極右派	立憲民主党（カデット）	スターリン
同 右派	メンシェヴィキ	レーニン
同 中道派	社会革命党（エス・エル）	ボリシェヴィキ：トロツキー 社会革命党
同 左派	ボリシェヴィキ： ブハーリン レーニン スターリン トロツキー	立憲民主党（カデット） メンシェヴィキ
同 極左派	アナキスト	アナキスト

(Krejčí, p. 116)

図6 ロシア革命のパターン



太い横線は多少とも「制度化された」各派勢力の存在をしめす。曲線は権力の座の移動を概略的にしめす。  
(Krejčí, p. 117)

す。<sup>17)</sup>

以上の「内発的」革命と比較しますと、非西欧型の三革命は、いずれも異質の文明＝西欧文明の挑戦に応答する「外発的」革命としてはじまった点で共通性をもつものの、固有のトルコ文明なりトルコ人意識をもたないままみずからをイスラム世界の一員とみなしてきたトルコ人の場合には、西欧化のもつ意味あいがロシアや中国とはややちがっていたようです。そこでは、西欧化とは、西欧の生活様式を葛藤なしにまるごと受け入れて、トルコを西欧諸国の技術水準・文化水準まで引上げていくことを意味していました。「第二の文明は存在しない。文明とはヨーロッパ文明であり、花もイバラもふくめたそれを輸入するしか道はない」（アブドゥラー・セヴデット）というのがトルコにとっての西欧化であり、近代トルコ建国の父ケマル・アタチュルクにしてもその思いはおなじであったといわれます。西欧文明は合理主義のみならずナショナリズムを昂揚する力をもっており、西欧文明をうけ入れることはトルコ人の民族性を確立する助けになる、トルコのナショナリスト＝トルキストはそうかんがえて欧化主義者と手を組み、シャリヤー（イスラム法）の適用に固執するイスラム主義者にたちむかうことができました。

ケマルの共和人民党にとっては、革命の推進つまり急進的な西欧化の推進がとりもなおさずトルコ・ナショナリズムの伸長にほかならなかったわけで、極端ないいかたをすれば、トルコ人の民族意識は国家の非イスラム化を敢行した「革命後」に目覚めたとすらいわれます。図4の革命勢力の色分けが他の場合とちがってやや明確な輪廓を欠き、権力のシフトをしめす軌跡が決定的なゆれもどしをうけることなく西欧化の方向へ直進していくという経路には、トルコ革命のもつそうした特徴が反映しています。トルコにおいて、極右から極左にいたる西欧型の政治勢力が分化し多元的に競りあう状況が定着するとすれば、それは大統領の個人支配制が議

会支配制に最終的に切りかわり、軍の介入によるあともどりが一切きかなくなることといっていよいでしょう。トルコ「民族」革命の〈うち固め〉過程が最終的にどのあたりに帰趨するかは、まだ確言はできないようです。

中国革命の形態論的なパターンで一番目立つのは、極左方向への〈変動〉（文化大革命がそれです）が、さきにふれたとおり、他の革命にくらべて革命勃発の時点からかなりおくれで発生していることですが、革命過程が〈うち固め〉の段階に入るとともにしだいに権力の座が革命中道派の立場に収斂していく点では、基本的なパターンは貫徹されているといっていよいでしょう。

ロシア革命の形態論のパターンで最初に目につくのは、西欧型革命のときとちがってとくべつの〈制度化〉がおきていることです。1905年、上層の諸階級がじぶんたちの利害を表現するための制度をもたないでいるうちに、ロシアの都市労働者は帝政社会のなかに労働者評議会＝「ソビエト」とよぶ権力基地をつくりだしたのです。1917年2月の〈爆発〉は、ロシア社会のほとんどすべての集団の不満が合体したものでした。ここで再登場した「ソビエト」は、ボリシェヴィキが権力を入手するうえで決定的な役割を果たします。

その後の経過はよく知られていてくりかえす必要もありませんが、クレイチー氏は、個々の革命勢力が左右両翼のどこに座を占めていたか、について世におこなわれている「理解」に根本的な修正を加えます。<sup>18)</sup> 西側思想の伝統的な枠組みでは、ボリシェヴィキはもっとも急進的・革命的なプログラムを掲げた集団の一つ、アナキストにつぐ革命勢力の最左翼の一つとされてきたわけですが（表2.の第二欄の位置づけがそれにあたります）、クレイチー氏は、西側の思想的物差しをロシア社会に機械的に適用することを排し、「ロシアじしんの伝統と長期的な発展傾向」をよりどころにして各勢力を位置づけます。この結果、ボリシェヴィキは、ロシア

17) Ibid., p. 92.

18) Ibid., pp. 114-5, 123 などを参照。



の政治伝統にきわめて近く位置する革命の右派勢力ということになり、それとは逆に、それぞれ西欧型の社会民主主義と自由主義の血脈をうけついでメンシェヴィキと立憲民主党は、ロシアの伝統からそれだけとおくはなれ、したがって極左派に近い方向へと大きく左にブレた位置を占めることになるのです。

クレイチー氏のこの「位置づけ変更」は、現実には即したきわめて適切な修正といつてよいでしょう。フランス革命（本書で意味する一世紀以上つづいたそれ）から、ロシアのリベラルたちは「自由主義のモデル」を吸収し、メンシェヴィキは「ブルジョア社会の成熟のあとにくる民主的社会主義」のモデルを受け取りましたが、1905年と1917年をつうじて、どちらのモデルもロシアの現実には即応しきれずに姿を消しました。ロシアの社会は、ピョートル大帝らしい二世紀にわたって推進された欧化作業にもかかわらず、西欧型の転換を可能にするほど西欧化してはいなかったといえなくはありません。

これに反してポリシェヴィキが西欧から吸収したのは、「西欧文明の異端」（トインビー）「西欧の社会システム全体に極端に対立する一つの哲学」「じぶんたちの政策が正しいかどうかを全国民の意見を聞くことなく全国民に指示することを正当化する」ことを可能にする教義でした。<sup>19)</sup> かれらは労働者を主人公とする真のプロレタリア民主主義はつくりだしませんでした。が、伝統的な政治文化とあたらしい、より効果的な大衆動員手段・強制手段の組合せによって、アンシャン・レジームよりは国民の支持を調達するのに説得度の高い体制をつくりあげ（統治にあたるエリートと被治者のあいだの伝統的なギャップはちじまらないままでしたが、民衆が党や国家機関にリクルートされていく社会的移動性は拡大しました）、権力を保持しつつロシアを強力な国家に再生させることに成功しました。

こうしてロシア革命のパターンの最大の特徴

となる、レーニンついでスターリンによる権力の座の右方向への系統的〈変動〉が発生します。国内戦が止みクロンシュタット反乱の鎮圧と「労働者反対派」の切りすてをもって変動の〈中断〉が完成したあと、書記長スターリンの登場によって、レーニンのはじめた右よりのシフトがさらに決定的に進行し、農業集団化の前後から四分の一世紀にわたってロシア史上にも例のない絶対的専制の時代がやってくるのです。

こうしたポリシェヴィキの座標がロシア本来の政治文化にどれほど深い親和性をもっていたか、そのことはたとえばボグダーノフやルナチャルスキーといったポリシェヴィキがマルクス主義を物質文明の時代にふさわしいあたらしい「宗教」<sup>20)</sup>という角度から信奉し、レーニンが死去するや、レーニンのミイラをご神体とする新宗教の霊廟をつくって礼拝の対象にするとともにロシア人民衆の聖物崇拝の欲求もみたすべし、と建議して、いち早く政治局の賛成をえた事実で徴してもあきらかです。<sup>21)</sup> レーニン廟実現のいきさつは、わたくしにはポリシェヴィズムの本質が、人民主権思想の時代に耐えうるあたらしい神権説を打ちたてる点にあったこと、それは王を排して権力をにぎった書記たちが帝王神権説にかえて登場させた歴史の神の付託による「書記神権説」にほかならないこと、を象徴しているようにおもえてならないのです。

スターリン死後のソビエトでは、レーニンの路線とその右に位置するスターリンの路線とに区切られたポリシェヴィキ的伝統の枠内で、政策の変動がつづいてきましたが、クレイチー氏は、ロシア革命はこの幅の枠内で〈うち固め〉の

19) レーニンの初期の同志であるポトレソフは、そうしたポリシェヴィキの特質をいち早くみぬいていた人物の一人です。См. Б. Байль, Драма Создателя Партии, «Обозрение», No. 9, 10 (1984).

20) ただし——マルクス主義への「信仰」は本質において擬似宗教とすらいえないかもしれません。むしろ、神のみすべてをしり給うと信じ、おのれの出で行くところを自分はいらないことをしっていたモーセの姿勢が本来の信仰だとすれば、じぶんたちは歴史の方向をしっていると信じたポリシェヴィキの態度は、じつは宗教の対極にたつもの、非宗教の最たるものというべきかもしれません。Cf. Alain Besançon, *Les Origines Intellectuelles du Léninisme* (Paris, 1977).

21) Nina Tumalkin, *Lenin Lives* (Cambridge, Mass., 1983), pp. 20-21, 174.

過程を完了しつつあるのではないかと推定しています。そして、かりにロシア革命が依然として〈うち固め〉の段階には立ちいたっておらず、こんどに本格的な西欧化の局面をひかえているという可能性が否定し切れないとしても、「革命までの200年以上にわたる西欧化の失敗は、その点を予測する上できわめて慎重であるべきことを教えてくれる」<sup>22)</sup> といましています。

なお、ロシア革命には〈中断〉〈しめつけ〉のあとにふつつ伴う〈逆転〉が存在せず（べつのいいかたをすれば、〈しめつけ〉過程自体が〈逆転〉を構成しているともいえます）、したがってロシア革命も〈復古〉とこれをくつがえす名誉革命の局面を欠いていますが、その大きな理由は、図でみるように、革命の〈しめつけ〉が革命勢力の極右派の位置において遂行されたことにあります。こうして革命前の特徴である強固な位階制や愛国心、ナショナリズム等々が復活してソビエト体制の永続する特徴となるわけですが、そこでおきたのは、フランス革命のさいのナポレオンⅠ世の登場にもっとも近い事態だというのが著者の判断です。ナポレオンは、クロムウェルや急進的フス派などが革命左派の座標に立って〈ひきしめ〉を行ったのとちがい、中道派の位置で〈ひきしめ〉を行ない、〈逆転〉を経験することなく〈うち固め〉に入りうる態勢になるのですが、ここで外国への膨脹に手をだして失脚してしまいます。ところが、スターリンの「帝国主義的ポリシェヴィズム」は慎重にナポレオンの愚かさを犯すことを避け、西側世界の内部紛争を活用して生きのびることに成功するのです。

ロシア革命が〈逆転〉の局面を欠いたもう一つの理由は、ポリシェヴィズムがテロの広汎かつ反覆的な利用によって、ありうべき反対勢力を系統的に絶滅させたことにも求められましょう。革命のなかでテロが中国やトルコを大きくしのぐ一貫性をもって実行され、大粛清を頂点にして都合5回におよぶ大波となってソビエト・ロシアを洗った事実は、たんにスターリン個

人に帰すわけにはいかないポリシェヴィズムの政治文化の一特徴をしめしています。

かりにクレイチャー氏にならって、社会主義を名のる体制を、社会の重要な意志決定にたいする「労働者の実質的参加」の達成度によって二分するなら、ロシア革命は生産手段の社会化・国有化によって「制度」としての社会主義＝「制度的社会主義」はつくりだしたかもしれませんが、参加にうら打ちされた「達成社会主義」を実現したとはとうていいえません。<sup>23)</sup> しかしながら、革命家たちが主観的に何を達成しようと目ざしていたかはべつとして、ロシア革命が当時のロシアが直面していたより基本的な矛盾ともいえる「大国としてのロシアが占める地位の重要性とその社会構造の時代おくれの脆弱性とのあいだの、またロシア帝国の光輝とその諸制度のみすばらしさとのあいだの矛盾」<sup>24)</sup> をひとまず解決したことはたしかであり、その点は革命の最大の成果とすらいってもたぶんいいすぎにはなりません。そうだとすれば、ソビエト・ロシアは革命によってむしろ大国主義の土台を強化したことになるわけで、その意味ではソビエト・ロシアが東ヨーロッパをはじめとする「兄弟諸国」に抑圧の手をのばすのにかならずしも不思議はないことになります。上にみた革命の形態論的パターンとそこでの革命勢力のスペクトルは、ロシア革命が解こうとした真の争点がなんであったのかについて、わたくしたちに再考を強いずにはおかないのです。

クレイチャー氏の「革命の解剖」は荒削りな素描の域をでない点をふくんでおり、トルコや中国について、また両国のパターンとロシアのそれとの相互関係について基本的に異論をおさえかねる部分もいくつかあるものの、氏が開拓者の少い形態論の建設に敢然と挑戦し、もろもろの革命を相対化して比較するのに有効な一つのユニークな図式をつくりあげたことはたしか

22) Krejčí, p. 123.

23) Krejčí, *Democracy and Socialism: Central Europe as the Testground of Their Relations*, History of European Ideas, vol. 3, No. 4 (1982).

24) Isaac Deutscher, *The Unfinished Revolution: Russia 1917-67* (Oxford, 1967), p. 14.

です。それは、一つには「形態論」の観点に立つことじたいがもたらした利点によって、つまり、「原因論」の立場から革命を論じるときにおち入りがちなイデオロギーや価値観の束縛から自由になりえた結果、可能になったことといえましょうが、理由はそれにつきるものではなさそうです。そもそもクレイチャー氏に形態論モデルの探求を推進させたもの、それは戦後のチェコ「革命」の現実に幻滅するなかで生じた、ロシア革命を「相対化」せずにはやまじという

情熱であるようにおもわれるのです。なお、この形態論モデルをわが近代日本の変革の過程に適用したときどういう発見が可能なのか、そもそも日本の過程については終末点をなにをもって定義しどこにおいて検討をはじめるのが適当なのか——著者が手をつけずにのこしているこの問題は、わたくしたちにとっての宿題といえそうです。

(すずき はくしん・社会学部助教授)